7月6日　御言葉をめぐって整えられる奉仕者 聖書黙想

テキスト　使徒言行録 7章1〜7節
子どもカテキズム　問44
参照教理問答　ハイデルベルク信仰問答 問1,6
ウェストミンスター小教理問答 問46

〈聖書テキストの解説と黙想〉

ステファノは、エルサレム教会の中で選ばれた霊と知恵に満ちた評判の良い7人の1人でした。ステファノは、知恵と霊とによって語るので、ユダヤ人との議論では負けませんでした。ステファノとの議論で打ち負かされた人びとは、ステファノが「モーセと神を冒涜する言葉を吐くのを聞いた」と人びとを唆しました。そして、民衆、長老たち、律法学者たちを扇動してステファノを襲って捕らえ、最高法院に引いていきました。それだけではなく、最高法院において、偽証人まで立てて、「この男は、聖なる場所と律法をけなして、一向にやめようとしません」と訴えました。

そこで、議長である大祭司は、ステファノに「訴えのとおりか」と尋ねました。こうして、ステファノは、弁明を始めました。この弁明は、7章2節から53節まで続きます。

最初に、モーセが預言者として神の民イスラエルに「聞け、イスラエルよ」(申命記6:4) と語りかけたように、「兄弟であり父である皆さん、聞いてください」と最高法院の議員たちに訴えかけます。

ステファノは、2節から8節まで、創世記に記されているアブラハム物語を要約して語ります。「わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき、栄光の神が現れ、『あなたの土地と親族を離れ、わたしの示す土地に行け』と言われました」。

創世記11章31節から12章1節には、次のように記されています。「テラは、息子アブラムと、ハランの息子で自分の孫であるロト、および息子アブラムの妻で自分の嫁であるサライを連れて、カルデアのウルを出発し、カナン地方に向かった。彼らはハランまで来ると、そこにとどまった。テラは二百五年の生涯を終えて、ハランで死んだ。主はアブラムに言われた。『あなたは生まれ故郷父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。』」

ステファノが大雑把に「メソポタミア」と呼んだ地は、「カルデアのウル」のことです。また、ステファノが用いた「栄光の神」という表現は、聖書には、詩編29編3節で「主の御声は水の上に響く。栄光の神の雷鳴はとどろく」と記されている一回しかでてきません。「栄光の神」と表現することで、アブラハムをご自身が示す地に導いた神の力強さ、偉大さを言い表したと思われます。4節よりステファノは、カルデアのウルを出た後のことについて語ります。

「それで、アブラハムはカルデア人の土地を出て、ハランに住みました。神はアブラハムを、彼の父が死んだ後、ハランから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、そこでは財産を何もお与えになりませんでした、一歩の幅の土地さえも。しかし、そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに対して、『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』と約束なさったのです」。

創世記12章4節から7節には、次のように記されています。

「アブラムは、ハランを出発したとき七十五歳であった。アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方へ向かって出発し、カナン地方に入った。アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モレの樫の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。主はアブラムに現れて、言われた。『あなたの子孫にこの土地を与える。』アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた」。

アブラハムは、ハランを出て、主なる神の指し示した地、カナンに入っていきました。そこで、

主なる神よりこの地がアブラハムとその子孫に与えられました。

ステファノは、6節から7節で、主なる神がアブラハムにカナンの地を与える約束をした後の出来事について語っています。

「神はこう言われました。『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる。』更に、神は言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。』」

創世記15章13節から15節で、主なる神は、アブラムを深い眠りに襲わせた後、次のように言われました。

「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く」。

ステファノは、7節で主なる神が「この場所でわたしを礼拝する」と語ったと言います。この言葉は、出エジプト記3章12節に記されている主なる神がモーセに語った次の言葉です。

「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える」。

ステファノは、神を冒涜しているという疑いによって、最高法院へと連れてこられました。ステファノは、自分が決して神を冒涜していないことを伝えるために聖書から語っています。

ステファノは、主なる神が主の民を導く方であること、民は、自分たちを導く神にその与えられた状況の中で仕えていくことが強調されています。ステファノは、神殿礼拝にこだわる当時のエルサレムのユダヤ人に対して、聖書が決して神殿礼拝にこだわっているわけではないことを伝えようとしています。礼拝とは、「栄光の神」が民を召し出して整え、守り導いておられるので、行うことができます。ステファノは、ユダヤ人にこのことを伝えようとしました。

〈カテキズムの解説〉

ハイデルベルク信仰問答問6の答では、人間の創造について次のように告白しています。

「神は人を良いものに、また御自分にかたどって、すなわち、まことの義と聖において創造なさいました。それは、人が自らの造り主なる神をただしく知り、心から愛し、永遠の幸いのうちを神と共に生き、そうして神をほめ歌い賛美するためでした」。

本来、人間は、神をほめ歌い賛美するため、すなわち、礼拝するために主なる神によって造られました。

ところが、罪に堕落したことで、人間は、正しく神を礼拝することができなくなってしまいました。

しかし、神はそのような罪人に聖霊を送って、神のため、自分を罪から救ってくれた主イエスのために喜んで生きることができる者となるように、礼拝できる者に整えてくださいます。

「そうしてまた、御自身の聖霊によりわたしに永遠の命を保証し、今から後この方のために生きることを心から喜びまたそれにふさわしくなるように、整えてもくださるのです」(ハ問答1)。

礼拝は、私たちにとって第一のものであり、これがなければまことの人間として生きていくことができません。十戒の第一戒は、聖霊の導きによって守ることができるようにされます。

「第一戒が私たちに求めている事は、神を唯一のまことの神また私たちの神として知り、認めること、またそれにふさわしく神を礼拝し、神の栄光をあらわすことです」(ウ小46)。

「私たちの真の神さまだけを心から礼拝しなければならない、ということです。これがもっとも大切な戒めです。ですから、私たちは喜んで礼拝をささげます」(子どもカテキズム問44)。

私たちは、聖霊の導きによって、どこででも主なる神を礼拝できる恵みの中を生きています。

(浅野正紀)

7月6日　御言葉をめぐって整えられる奉仕者
説教展開例

テキスト　使徒言行録 7章1〜7節
参照子どもカテキズム　問44

〔単元のねらい〕

聖書に記されている主なる神は、私たちを守り導いてくださる栄光の神さまです。主イエス・キリストによって罪ゆるされた私たちは、この栄光の神をどこにいても礼拝することができます。そして、私たちを守り導く栄光の神は、私たちに送った聖霊の働きによって、私たちが喜んで礼拝することができるように、整えてくださいます。この恵みの中を今生きていることを語りたい。

私たちを導く栄光の神さま

エルサレム教会は、イエスさまの十二人の弟子たちを助ける働きをするために7人を選びました。ステファノは、この7人の内の1人でした。

ステファノは、イエスさまが救い主であることを力強くエルサレムの人びとに宣べ伝えていました。ステファノは、神さまから力を得て、福音を語っていました。ですから、誰もステファノに議論で勝つことができませんでした。多くの人びとがステファノに議論で打ち負かされました。議論で打ち負かされ、悔しい思いをした人びとは、ステファノが神さまに従わない人であるといううそをひろめました。

こうして、ステファノは、神さまに従わず、神さまをきちんと礼拝しないという罪のために捕らえられてしまいました。捕らえられたステファノは、ユダヤの議会であり裁判所でもある最高法院で裁判を受けることになりました。

最高法院の議長である大祭司は、ステファノに、「あなたは、神さまに従わない人物であると訴えられて捕らえられましたが、この訴えは、本当ですか」とたずねました。

そこで、ステファノは、大祭司と最高法院の議員に向かって、聖書の話をはじめました。ステファノは、聖書の話をすることで、自分が神さまに従っていること、神さまをきちんと礼拝していることを訴えようとしました。

ステファノは、最初、旧約聖書の創世記に出てくるアブラハムについて話しました。

「わたしたちの先祖であるアブラハムは、故郷のカルデアのウルにいた時、栄光の神さまに、こう語りかけられました。『あなたの土地と親族を離れて、わたしが示す土地に行きなさい。』」

神さまは、アブラハムに故郷のカルデアのウルで語りかけ、彼にこの土地を出るように命じました。こうして、アブラハムは、カルデアのウルを出て、ハランに住むことになりました。

ステファノは、アブラハムに語りかけた方を栄光の神さまと呼んでいます。「栄光」とは、とてもすばらしいこと、とても力強いことをあらわす言葉です。

神さまは、力強い御手をもって、アブラハムを導きました。栄光の神さまは、アブラハムの父、テラが死んだ後、アブラハムをハランからさらにカナンへと導きました。そこで、アブラハムにある約束を与えました。

「このカナンの土地をあなたに与えます。あなたの死後はあなたの子孫がこの土地を受け継ぐことになります」。

神さまは、それだけではなく、続けて次のこともアブラハムに伝えました。

「あなたの子孫は、わたしが与えたカナンの土地から別の場所に移り住み、400年の間、その土地で奴隷として苦しんで生きていくことになります。しかし、あなたの子孫を奴隷にする国民をわ

たしが裁きます。その後、あなたの子孫は、その国を脱出して、再びこの場所に戻ってきてわたしを礼拝することができるようになります」。

以上が、ステファノが最高法院の議長である大祭司と議員に語ったアブラハムの話です。ステファノは、アブラハムの話をすることで、いったい何を伝えたかったのでしょうか。

ステファノは、栄光の神さまが神さまを信じる人びとをどんな時も導いてくださる方であることを伝えようとしています。ですから、神さまを信じる人びとは、どのような状況の中にあっても必ず自分たちを導いてくださる栄光の神さまに仕えていくことが求められています。

ステファノの時代、エルサレムに住んでいた人びとは、立派な神殿に行って、神さまを礼拝することを大切にしていました。神殿礼拝を行うことがきちんと神さまを礼拝し、神さまに従っていることだと思っていました。

しかし、イエスさまが生まれて、エルサレムで十字架にかかって死に、三日目に復活し、天に上げられた後は、もはや神殿で礼拝する必要はなくなりました。

私たちは、わざわざ、エルサレムまで行って、神さまを礼拝しなくてもよいのです。それは、イエスさまは、神さまを信じる人びとのいるところどこにでも必ずいっしょにいてくださるからです。

そもそも、人間は、神さまのかたちにつくられ、つくり主である神さまをほめたたえ、礼拝する者としてつくられました。

ところが、人間が罪に堕落して、つくり主である神さまに背を向けて生きていくようになったことで、神さまをきちんと礼拝することができなくなってしまいました。

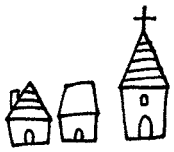
このような罪ある私たちのために、神さまは、イエスさまをこの世界に生まれさせてくださいました。そして、イエスさまは、私たちの罪を神さまの前で償うために、十字架にかかって死んでくださいました。

こうして、罪ある私たちが神さまの前に出ることができるようになり、喜んで神さまをほめたたえ、礼拝することができるようになりました。ですから、罪ゆるされた私たちは、どこにいても、どんな状況の中にあっても、神さまを礼拝することができます。

礼拝とは、栄光の神さまが私たちを招いてくださり、整えてくださることでどこにいても、いつでも行うことができます。私たちは、どこでもいつでも神さまを礼拝できる恵みの中を、今生きています。　（浅野正紀）

〔今週の暗唱聖句〕　使徒言行録 7章7節

更に、神は言われました。
「彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、
彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。」



7月6日　　御言葉をめぐって整えられる奉仕者　　幼稚科

〈ねらい〉

神さまは、私たちが主イエス様のために喜んで生き、喜んで礼拝できるよう、力を与えて下さっています。

〈展開例〉

「教会」と「祈り人」のぬり絵をしましょう。

7月6日　　御言葉をめぐって整えられる奉仕者　中学科

対話の手掛かりとして……

①ステファノは、まずアブラハムのことについて語り始めました。神の民イスラエルの歴史はこのアブラハムから始まったのです。アブラハムは、神様の言葉を聞いて、神様の示す地に向かって旅立ちました。「あなたの土地と親族を離れ」(3節）とあるように、慣れ親しんだ地と親しい者たちを離れて、旅立ったのです。人生を旅にたとえることがありますが、信仰もアブラハムに見られるように、旅に出ることなのです。しかし、その信仰の旅は、普通の旅とは違います。自分が行きたい所に行くのではありません。あるいは、綿密に旅の計画を立てて歩み出すことでもありません。反対に、何の計画も立てずに、行き当たりばったりの旅に出かけることでもないのです。では信仰の旅において大切なことは何なのでしょうか。それは「神様の言葉」に聞き従うことです。

②「財産も何もお与えになりませんでした、一歩の幅の土地さえも」(5節）とあるように、「これは自分のもの」と言うことができる物を何も持たずに旅に出ました。つまり自分の持っているものに依り頼むことが全くできない中で、ただ神様の約束の言葉を信じて歩み出して行くのです。それが信仰の旅です。アブラハムは、この神様の約束の言葉を信じて旅立ち、歩んだのです。「約束」とは、今はまだ目に見える現実となっていないことの約束です。目に見える現実においては、一歩の幅の土地さえも得てはいないのです。また、アブラハムも妻のサラも、旅立った時には既に高齢であり、子どももいませんでした。そういう現実の中で、「この地をあなたに与え、あなたの子孫に相続させる」(5節）という約束だけを与えられて、それによって歩んだのです。さらに、エジプトへの移住と、そこでの奴隷の苦しみ、そしてモーセによる出エジプトとカナンの地への定住の歩みが予告されます（6〜7節)。これらのことも、まだ起っていないことの約束です。そのようなことが実現するという目に見える保証は何もない、ただの約束の言葉に過ぎないと言ってしまえばその通りのことです。しかし、アブラハムはこのような神様の約束のみ言葉を信じて歩みました。

③こういう信仰を見て、皆さんはどう思われるでしょうか。これは、「信仰の父」と呼ばれたアブラハムという偉大な人物だから、そのような立派な信仰を持つことができたのだと思うかもしれません。でも、創世記を読むと、そんなアブラハムも数々の過ちを犯したことが分かります。神様の約束よりも、自分たちを取り巻く現実の方が、より確かだと信じてしまったことがあったのです。そうだとしたら、この信仰の旅を最後まで支え、導いてくださるのは、アブラハム自身ではなく、神様御自身であることが分かります。「信仰の旅をわたしと共に歩もう」と声を掛けてくださった神様は最後まで、私たちの手をとり、約束の地まで導いてくださいます。「わたしの口から出るわたしの言葉もむなしくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ　わたしが与えた使命を必ず果たす」(イザヤ書55種11節)。信仰の旅、それは「冒険」とも言われます。冒険に出かけるとき、確かに不安はありますが、それにも勝ってワクワクする思いの方が強いのではないでしょうか。やがて、誰も発見したことのない大陸を見つけ、大きな喜びを得ることができるように、神様の約束の言葉に従う歩みの先には、まだ経験したことのない豊かな祝福があるのです。